

天プラの活動における地域連携の意義

高梨 直紘 (天文学普及プロジェクト「天プラ」/東京大学)

天文学普及プロジェクト「天プラ」は、天文学と社会の新しい関係を模索する、若手研究者らを中心としたグループである。天プラではさまざまな活動に取り組んでいるが、その中でも地域連携は重要な活動と位置づけている。どのような観点から地域連携に取り組んできたのか、具体的な活動事例を通じながらその変遷と現状、そして今後の展望について、バリアフリーの観点も絡めながら紹介する。

1. はじめに

天文学普及プロジェクト「天プラ」は、2003年に活動を始めた非営利の任意団体である[1][2]。12名の運営メンバーを中心に、50名程度の活動協力者によって支えられながら、天文学と社会の間をつなぐさまざまな種類の活動を行っている。

天プラが活動の目標としてあげているのは、天文学と社会の新しい関係を構築することである。天文学にとっても、社会にとっても、現代は激動の時代である。大型望遠鏡やデジタルカメラの登場に象徴されるように、天文学を取り巻くさまざまな環境の変化は天文学の急速な発展をもたらしている。一方、高齢化社会、少子化問題、エネルギー問題などのキーワードに代表されるように、戦後の高度経済成長期を経て、私たちの社会はさまざまな課題に直面する事態となっている。天文学も社会もそれぞれがこれまでと異なる様相を示している中で、両者の関係がこれまで通りであるはずがない。これまでの天文学と社会の関係を踏まえながらも、さまざまなコミュニケーション活動を通じていまいちど現代における天文学の意味を問い直し、次の時代の基礎的な枠組みとなりうる世界観を示し、社会実装していくことが我々の目標である。

そのようなビジョンの下で、我々が特に重視するのが地域と連携した活動である。図1は我々の考える知の循環図である。研究によって得られた新しい知見がどのように社会に還元され、人々の世界観に影響し、それが社会的な価値となって、ふたたび研究を後押しする力になるのかを表したものである。この中で、天プラが主に行っている活動は「専門分野の構造化」と「知の体系への接続」であるが、後者に関しては、その中心にあるのは対話活動であり、共に活動を行う市民であり、それが実施される地域である。以下では、天プラの活動の中でも、特に地域連携に関係したものをいくつか紹介したい[3]。

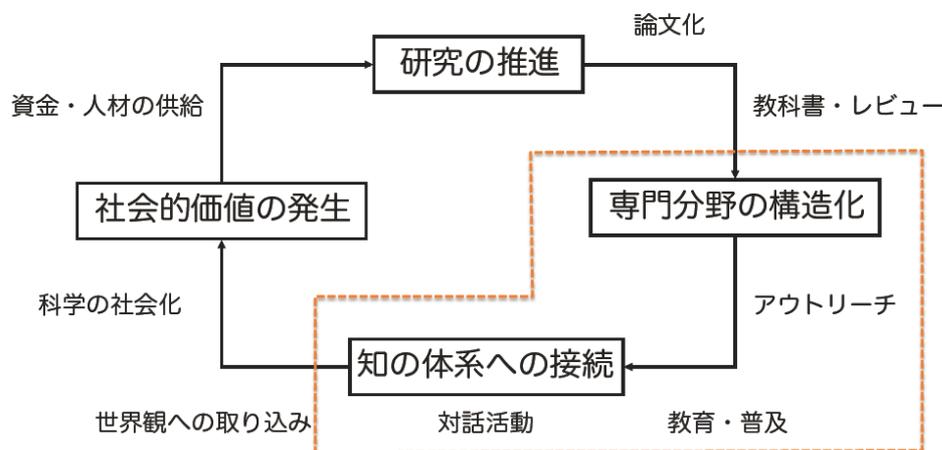


図1 知の循環図

天プラの考える知の循環図。破線内が天プラの主な活動。

2. 地域連携した活動の紹介

2.1. アstroクラブ

地域に住んでいる市民との連携は、地域連携の基本であろう。Astroクラブは、三鷹市立第四小学校の児童を主対象として行われている天文部活動である。2005年に活動を開始し、今年で8年目を迎える。毎月1回、日曜日の夜に学校に集まり、晴れれば屋上に出て星空観察を、曇れば室内で工作や座学を行っている。毎年小学校1年生から6年生まで幅広い学年の児童が、おおよそ40人ほど参加しており、卒業生らの一部はクラブのサポーターとして活動を支えてくれている。毎回、保護者も一緒に参加しており、子どもよりも親が宇宙に夢中になってしまったケースも見受けられる。学校側との調整や参加者への案内など、運営に関するさまざまな作業は保護者らが中心となってボランティアで行われており、天プラにとっての負担は小さく、持続性のある活動の形が実現できていると言える。当初は当事者主権の考え方から活動内容についても保護者からの意見を聞いていたが、最近では、保護者の視点を意識しつつも天プラ側が中心に内容を組み立てており、適切な落としどころを見つけることができたと考えている。



図2 Astroクラブの様子
望遠鏡工作など、教室内での活動も行っている。

2.2. プロペラ星空観望会

地域にはその地域にしかないユニークな施設がある。そのような施設を見つけ、協力してイベントを行う事は、より多様な関心を持った参加者を集めることにつながる。例えば、天プラの活動重心である東京都の多摩地域には、調布飛行場がある。調布飛行場は東京都営の飛行場で、住宅地に囲まれた中にある。主に離島航路のプロペラ機が離発着する小さな飛行場で、夜間には離発着が行われない。この状況に目をつけた我々は、飛行場の滑走路(正確には駐機場)での天体観望会を実施した。飛行場の広い空で星を

眺めるのに加え、飛行場のスタッフの協力を得て、飛行機についてのレクチャーもメニューとして取り入れた。天体観望に関心がある人はもちろん、飛行機に関心がある人にも魅力のあるイベントとして成立できたと考えている。



図3 プロペラ星空観望会

飛行機がしまわれているハンガーの壁に星空案内を投影しているところ。

2.3. みたか宇宙塾

地域には、さまざまな人が住んでいる。その中には、関心があるイベントがあっても、なんらかのバリアーがあるために、その場に出て行きにくい人もいます。例えば小さな子どもを抱えたお母さんは、その好例であろう。平日の夜間にイベントがあっても、子どもを寝かしつけなければいけない時間にそこに参加するのは簡単ではない。仮に子どもを連れて参加できたとしても、子どもの面倒を見ながらの参加は、どうしても集中力が削がれるだろう。そういったイベントに参加するためのバリアーを持った人を見つけ、そのバリアーを可能な限り取り払うような事を私たちは考えるようになった。みたか宇宙塾は、その先駆的な例である。地域にある小さな子どもを抱えたお母さんのグループと相談し、平日の昼間、無料託児付きの天文教室を開催した。託児を利用して集中して参加しても構わないし、子どもと一緒に会場内で話を聞いても構わない。内容も親子向けではなく、あくまでも大人の女性向けの難易度を用意する。このようなイベントを通じて、お母さん方に天文学に触れる機会を提供することができた。



図4 みたか宇宙塾

小さな子どもと一緒に参加できるが、内容は大人向けである。

2.4. マルチリンガル観望会

イベントに参加するためのバリアーには、さまざまな種類のものがある。例えば、言語もそのひとつだろう。ふつう、日本でされる天文イベントの多くは、日本語でのみ対応している。そのような場所に出かけていける日本語を母語としない人たちもいるだろうが、出かけて行きにくい人たちも少なくないだろう。さまざまな国や地域からやってきて、日本に住んでいる人は少なくない。地域に住むそういった人たちも参加しやすいイベントとして、日本語だけでなく、英語、韓国語、中国語でも対応するイベント(国立天文台の見学会と天体観望会)を実施した。NPO 三鷹国際交流協会を通じて参加の呼びかけを行い、天プラのメンバーの留学生や、近隣にある東京外国語大学の大学院生などを中心に対応にあたった。イベント開催日はちょうど中秋の名月であり、文化交流という側面ももったイベントであった。

2.5. マンションでのイベント

用意した会場に来てもらうのではなく、こちらから出かけていくアプローチもあるだろう。そのような考えの下で行っているのが、マンションなど集合住宅への出張イベントだ。特に最近建ったマンションの多くは、集会室のような共同利用施設を備えているものが多く、そこを利用した天文教室や天体観望会を行っている。マンションには、天文や宇宙に関心の高い住民からほとんど関心のない住民まで、さまざまな人が住んでいる。わざわざ出かけていくまでの関心はないけど、自分の住む場所で行われるのなら顔を出してみようか、という人も取り込めるのがこのアプローチの優れた点である。マンションにとっては、地域住民の交流という側面もある。昆虫のように人気はあるけど嫌いな人がいるというコンテンツよりも、嫌いな人

がない天文宇宙というコンテンツは、多様な住民を抱えるマンションにとっては人を呼びやすいと認知されている。また、そのような学びの場がマンション内にできることは住宅の価値を上げることにつながり、物件を開発するディベロッパーにとっても好都合である。地域住民、開発者、私たちの三者にとって有意義なイベントとして成立していると言える。

3. 地域連携とは

前章では、天プラが行っている地域連携活動の例をいくつか紹介したが、ここでは天プラが考える地域連携のエッセンスをまとめてみたい。

私たちが考える地域連携とは、突き詰めれば、来るのを待つのではなくこちらから出かけていくアプローチを指す。ふだんの自分たちが活動しているテリトリーを出て、相手の土俵に飛び込み、そこでの活動の形を探っていく方法論だと言える。テリトリーを出るとは、すなわち、これまでに出会ったことがないような人たちと出会うことである。さまざまな人たちの中には、私たちとまったく異なる価値観や考え方、嗜好を持った人もいるだろう。そのような人たちとの出会いは、私たち自身のアイデンティティを問い直し、結果として新しい視点を私たちにもたらす。新しい視点からふたたび天文学と社会の関係を眺め直した時に、新しい可能性が拓けてくるのである。

例えば、アストロクラブでの活動は、日常の中に天文学に触れる機会があることが、私たちの想像以上に有意義であることを教えてくれた。宇宙や科学への関心を高めるだけではなく、毎月親子で通ってこることが家族の風景のひとつになっている様子は、家族のあり方についても少なからず天文学が影響を及ぼしている事例であると言えるだろう。

このような地域連携を続けていくコツは、お互いに無理をしないことである。持続性を重視するのであれば、活動に関わるすべてのステークホルダーにとって、継続する意義があるようにしなければならない。一般的に、地域での活動には潤沢な予算はないが、その分、縛りもない。急がばまわれで活動するのが良いだろう。

また、トラブルも楽しむ気持ちでやるのが良い。相手のフィールドに片足を突っ込んでイベントをするということは、常に経験のない世界で活動するということである。したがって、予期せぬことはいつもおこる。しかし、それこそが見えてきた新しい課題であるとも言える。それは、活動の相手側にとっても同じ事である。関係者みんなで協力し、解決していくことで、地域との関係も深まっていく。

地域にはいろいろな人が住んでいるが、その中でもお母さんは頼りがいがある。地域コミュニティのハブには、必ずと言って良いほど、ユニークなお母さんがいる(=お父さんではない)。そのようなお母さんを見つけて、なにごとにも相談するのが良い。社会においては、天文学よりもはるかに役立つ知識と経験を有しているお母さんの協力を得ることで、地域のさまざまなネットワークへのアクセスが可能になるだろう。

私たちは、最終的に地域に溶けていくつもりで活動を行っている。元々天プラは NPO でもなければ、法人格を持った団体でもない。いつ消えてなくなってもおかしくないグループである。したがって、活動は天プラと地域の間で成立するのではなく、天プラに参加している個人と地域を支えている個人の間で成立するように変化していこう。逆説的であるが、組織と組織の関係よりは、個人と個人の関係の方が持続性は高くなると私たちは考えている。組織は代替が難しいが、個人なら代替が比較的容易だ。活動の枠組みやそれを支える思想さえ残れば、プレーヤーは誰でも構わない。そのようなつもりで活動をしていくことが、意味のある、持続的な地域連携につながっていくだろう。

4. まとめ

地域連携は天文学と社会の関係を考える上で、もっとも重要な活動場所のひとつである。多様な価値観を持つ人々とともに、天文学を通じたコミュニケーションの形を考えていく過程そのものが、社会にとっての天文学の意味を見いだす活動であると言えるだろう。その中では、ユニバーサルデザインの考え方は自然と発揮される。今後は、さらなる地域活動の可能性を追求すると同時に、天文学分野以外の学術分野にも活動を働きかけ、地域と学術研究をつなげる仕組みを一般化していきたい。

参考文献

- [1] 天文学普及プロジェクト「天プラ」ホームページ <http://www.tenpla.net>
- [2] 高梨他(2008)「天文学普及プロジェクト「天プラ」の挑戦」天文教育 2008年9月号 (Vol.20, No.5), pp 32-39
- [3] 塚田他(2009)「地域の力による天文学普及の試み」天文教育 2009年3月号 (Vol.21, No.2), pp 55-59